

第一話 山のくらし

松崎 有理

わたしは木。天を見あげてまっすぐ伸びる杉の木。夜が明ける、また新しい一日がはじまる。朝日が差す。わたしはゆたかな太陽の恵みをあびて光合成をはじめめる。

体温があがる、脈拍が早くなる。そこで芸術家は夢から覚めて目をあけた。左手をあげ、手首のウェアラブルデバイスに語りかける。「おねがいモラヴェック。いま何時か教えて」「午前八時です。予定どおりのお目覚めです」デバイスが中性的な声で応えた。「体温は三六・九度、血糖値は九九。血圧は上が一二、下が七三。二十一歳女性として理想的な健康状態ですよ」

「あ、そう」芸術家はベッドから降りて身支度をはじめた。パジャマから藍染デニムの作業着に着替えるとき、腹部に貼ったミールパッチを取り替える。経皮吸収型製剤の食分野への応用品で、当初は宇宙飛行士むけに開発された。現在では災害救助から介護まで口から食べにくい状況で幅広く活用されている。ビタミンやミネラルなどの補食型も人気だが、彼女がつかうのは全栄養型だ。

かなり助かってるけど、貼り替えの手間があるからなあ。ああ、光合成できるようになりたい。

裸足で床を踏みつつアトリエへ移動する。十月の高尾山のひんやりした朝でも、無垢板の床は足裏にぬくもりを伝えてくる。まるで木に体温があるみたいだ。

アトリエは板の間を一段おりた土間である。

北側の大きな窓を背景に、昨夜ようやく仕上がった作品がたたずんでいた。人体に似ているが、胴部に大きな穴があいて窓の外の風景がみえる。顔には目鼻こそあれ口がない。素材はこの山から切り出してきた杉だった。

杉材はやわらかすぎて彫刻に向かない。だが地元の素材を利用するのが彼女の創作姿勢だ。

作品タイトルは「わたしには口がない、それでもわたしは叫ぶ VIII」。食べない自由を表現している。食事なんてめんどろ。そんな時間があつたら一分一秒でも長く作品に触れていたい。

さて、完成の感慨にひたるのもこのくらいにして。準備をはじめなきゃ。

今日は土曜日。午後一時から南青山のギャラリーで「食」をテーマとした立体作品のグループ展がはじまる。だから昼までには作品を搬入せねばならない。完成時の高さはル・コル

ビュジェのモデュロールに倣^{なま}って一八三センチだが、伝統的な木組の技法をつかつており、六つのパーツに分解できる。

分解作業が終わるころ、左手首のモラヴェックが振動した。「お仕事中すみません。緊急事態です」

「なに」芸術家は額の汗を軍手でぬぐってから木槌を土間に置く。「地震警報なの」

「ちがいます。ドローン障害です。現在、東京上空のコンディションは安全飛行閾値を下回っています。原因究明中、復旧未定」

耳を疑った。「なにそれ。どういうこと」芸術家は大きな窓からみえる空に目をやる。「天氣のせい、じゃないよね」ドローンが飛べないのは大型台風がきているときくらいだ。天気予報とあわせて配送障害予測情報が通知されるのでこれまで困った経験はない。

「つて、ことは」いやな予感がした。「予約ずみのドローン配送機、こられないんじゃない」

「そのとおりです。残念ながら」

「ちえ、間が悪いなあ」芸術家は頭を振った。しかたない、自分で届けるか。「おねがいモラヴェック、エアタクシーを呼んで」

「残念ですが、同じ理由でタクシーも飛べません」

「うひゃあ、どうしよう」残る手段は陸運だが、最寄り駅までは四キロ以上ある。作品を抱えて歩き通せる距離ではない。

考えるときの常として腕を組み、土間をぐるぐる歩き回る。すると、三年前にこの古民家を借りたとき家主がいった台詞を思い出した。倉庫のものは自由につかつていいですよ。たしか、なんか乗り物なかったっけ。

倉庫の隅にうち捨てられていた電動バギーはひどく古い型だった。電源は入ったものの、モラヴェックとつないでコマンドを出すこともできない。

「直接、音声入力するタイプのようですよ」

「そんなのつかうの、はじめてだなあ」梱包した作品をバギー後部の荷台にしっかりとくりつけてから命じる。「高尾山口駅まで。壊れものを積んでいるから慎重運転モード」

ふたつのヘッドライトが点った。片側がウインクのように点滅する。「がってんだ、まかせてくれ。さあ乗んな」

一抹の不安がよぎる。なんなの、この言葉づかい。

ほどなく不安は的中した。野鳥の声が響くのどかな山道を下っている途中、バギーは。

「あ、エネルギーが」とつぶやいて完全にエンジンを止めてしまった。目を閉じるようにへ

ツドライトが消える。

「ちょっと、なに。こんなところでバッテリー切れなの」

座席の前についたコントロールモニタを両手でばんばん叩くがもちろん効果はない。

「歩きましようよ。残り二キロ弱です、じゅうぶん間に合いますよ」

モラヴェックの意見に従うしかない。荷物を肩にかつぎあげる。なんとか運べそうだ、杉が軽い木材でよかった。

「あんたも手伝ってよ」

「むりです。かわりに駅までの道案内はいたします」

最初のうちこそ軽口が出たが、しだいに荷の重みが肩に食いこんできた。背中が痛みだす。全身に汗がにじむ。ときおり、荷物を下ろして休憩する。空を見あげる。みごとに秋晴れだ。あぁなんて広びろとした空、生まれ育った都心とはぜんぜんちがう。やっぱり制作の場に山を選んでよかったな。

一瞬、光が遮られた。頭上をなにかが舞っている。

目をこらした。蝶だ。黒でふちどられたうすあおい大きな翅をゆったりはばたかせながら、長い列をつくって飛びすぎていく。まるで空中に道があるかのように。

へええ、美しいな。いいものみた。

青い蝶の行列は何頭いるのかわからないほど途ぎれなくつづいていた。しばし観察し、その映像を心の記憶庫にしまいこんでから、芸術家は出展作品をまたかつぎあげた。

都心へのリニア急行は渋谷が終点で、そこから地下鉄に乗りかえるつもりだ。顔認証改札を通って乗車し、空いた席をさがす。あった。「やれやれ」小声でつぶやくと、光抗菌シートに腰を下ろして作品をすっかり前で抱えた。あとは寝ていたっていい。体の力を抜き、両目を閉じる。安心感からうつらうつらしはじめた。意識が溶けていく。ああいい気持ち。

だがほどなく眠りは破られた。「ひさしぶりね。元気そうでよかった」

ぎょっとして顔をあげる。右側の座席にいつのまにか、母が座っていた。紺のスーツを着て大きな風呂敷包みを膝に載せている。いつもの出張帰りのスタイルだ。風呂敷は近年みなおされていた。布いちまいというシンプルさゆえ多様な用途に対応できるからだ。

芸術家は言葉が出なかった。しまった、出かけるときあわててたから、モラヴェックの「会拒」モードをオンにしておくの忘れてた。

会拒とは、ひととつながらない自由を保証するシステムである。移動時に集中したいビジネスパーソンや、孤独をだいじにするクリエイターらに好まれている。彼女の場合、特定の

人間だけを避けるよう設定していた。

モラヴェックのやつ、会拒オフだっていつてくれればいいのに。気が利かない。

「そうだ、これあげる」母は風呂敷包みに手を入れる。三年ぶりにみる母も元氣そうだった。でもすこし白髪が増えたかな、抗老化処置とか興味ないひとだから。

「はい、出張土産」箱を手渡してきた。パッケージデザインに芸術家の目はくぎづけになった。素朴なようでするどい独特のタッチはあの有名木版画家のものではないのか。包装のRペーパーも和紙の質感をうまく再現している。発色もいい。

「あ、新宿。じゃあね、元気でね」芸術家がパッケージを鑑賞しているうちに、母は乗り換えのため席を立てて電車を降りていった。正味数分の再会であった。

でもこれ中身、お菓子でしょ。食べたくなかないのに。あの押しつけがましさはあいか
わらずか。

箱を裏返す。商品説明が印字されていた。砂糖、卵、寒天のみを使用したくちどけのよい
伝統菓子です。

ふうん。マシユマロに似てるかも。

意識がふと過去へ飛んだ。きよくたんに食の細い子どもであったころ、唯一いやがらずに
食べられたのは、噛む必要のまったくない菓子だった。

芸術家は菓子箱を作品といっしょに抱えこんだ。リニア急行は静かに、なめらかに乗客た
ちを終点の渋谷へ運んでいく。

南青山に着いたのは十一時四十五分だった。

ギャラリーでは他の出展作家たちが展示作業にいそしんでいた。半分くらいはどうみても
作業着姿で、残り半分は個性的な私服である。自作を置くスペースとして与えられた一角
で荷解きをはじめると、となりの区画から知人の塑像作家が声をかけてきた。

「お、ぎりぎり間に合ったね。そっちもドローン障害だったの」彼女の作業着は甚兵衛だ。
頭は手ぬぐいで覆っており、足下は足袋に草鞋である。和装も、気候風土に合った衣類とし
てみなおされていた。「なんかさ、蝶のせいだったらしいよ。意外なところが脆弱なんだね、
ドローンって」

あれか。芸術家の脳内でうすあおい翅のひらめきが再生された。「そういえばみたよ、蝶
の群れ。すっごいきれいだった」

「あたしも見た。きれいだったし許してやるかね」ふたりの芸術家はうなずきあう。
床に置いた菓子箱に塑像作家が目をつけた。

「あつそのパッケージ、棟方志功デザインじゃん。みせてみせて」と拾いあげる。「ふんふん、卵をつかった伝統菓子ね。おいしそうだなあ、開けていい」彼女は無類の食いしん坊である。

「どうぞ」開梱した木像パーツを組みあげはじめる。

Rペーパー包装は塑像作家の短く切り詰めた爪でもかたんに開けられた。しばしのち。「やあ、これ。おいしいよ。食べてみなよ」

「えっ」と振り返ったその口に、有無をいわさず菓子が押しこまれた。表皮は固く感じたがそれも一瞬で、舌に触れたとたん窓につく霜のごとく溶けていった。残ったのはふんわりした卵のかおりとやさしい甘み。

マシユマロとはぜんぜんちがうけど、やっぱり嚙まなくていい。喉を通っていく感触もほとんどない。

卵が入ってるから、家への土産には不向きだ。それに、買ったからってわたせるとは限らないのに。まさか、毎回。

胸の奥で固く凍ったなにかが溶けていった。組みあがった自作をみあげる。顔。あの顔、こうして見るとなにか気になる。なにかが足りない。

念のため持参してきた道具袋を出す。三角鑿のみを選ぶ。手を伸ばし、木像の鼻の下へ刃をあてる。位置ぎめする。角度をきめる。そして。

「えいっ」

一刀のもとに、下へふくらんだゆるい弧が刻まれた。木くずが足下へはらりと落ちる。一歩さがって出来ばえを確認した。うん、アドリブにしては上出来。これで欠如は満たされた。

台座にかがみこむ。指紋認証でキャプションボードのロックを解除する。「作品名変更」

『わたしには口がない、それでもわたしは叫ぶ VIII』から『口の発見 I』へ」

矩形のボードは二回点滅し、新しい作品名を表示した。

台座の上では木像がほほえんでいる。

「あれっ、今回は非食モチーフじゃないんだ。どういう心境の変化なの」

グループ展の主催者は目をまるくして木彫作品とそのタイトルを交互にみた。彼の右手のシャンパングラスには泡のたつ液体が入っている。見ているうちにピンクから黄色、紫へとゆっくり色を変えていく。

「いえ、べつに」芸術家はあいまいに笑う。彼女のほうはグラスも皿も持っていない。

初日の夕刻はオーブニングレセプションである。食テーマの作品展とあってギャラリー

内には3Dフードプリンタとオートシェフが一台ずつ運びこまれていた。内蔵AIがレシピデータベースにアクセスしてどんな細かい注文にも応えてくれる。だからここではビীগンも宗教上の戒律を守りたいひとでもアレルギー持ちも糖尿病患者もいっしょに飲食できる。近ごろ話題のオートバーテンダーもいて、客のオーダーをききながら笑顔を振りまいていた。腕二本のみのオートシェフとちがって歩行もできる。

「ところで食材の搬入、間に合ってよかったですね」ドローン障害はさきほど解消されたらしい。

「ひやひやしたよ。あやうく非食レセプションになるところだった」楽しんでね、と言い残して主催者が去ってから、芸術家は会場を見回した。作家たちは自作の横で客に解説をしている。ええ、買い出しという過去の風習をあつかった作品です。信じられますか、数十年前は人間がわざわざ店舗に出向いて、食品をまとめ買いて家まで持ち帰っていたんですよ。「ええっ、なにそれ。重そう。時間かかりそう。めんどくさそう」VR参加の客のホログラムが驚きの表情をみせる。「そのころ生まれてなくてよかったあ」

近くに客がいないのを確認してから、芸術家は左手首に口をよせた。「おねがいモラヴェック。実家にホログラム通話」

「え、いいんですか。会拒対象ですよね」デバイスはとぼけた調子で確認してくる。こんなところはほんと、人間くさい。

「いいから、つないで」接続を待つあいだ深呼吸する。なにを話そうか。いまグループ展に最新作を出してるの。うん、青山だから近いよね。それから、それから。

「接続しました」モラヴェックがいった。芸術家はもういちど深く息を吸う。口角が自然とあがった。(了)

